

博士課程教育リーディングプログラム 平成28年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
機関名	名古屋大学	全体責任者（学長）	松尾 清一
類型	複合領域型（情報）	プログラム責任者	松下 裕秀
整理番号	R02	プログラムコーディネーター	武田 一哉
プログラム名称	実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム		

＜プログラム進捗状況概要＞

1. プログラムの目的・大学の改革構想

本プログラムでは、情報科学・工学・医学系・経済の4研究科に跨る、機械・人間・社会を対象にした、「データ取得の学理」と「データ解析の数理手法」を体系的に学ぶとともに、「多くのケーススタディ」を行うことで「実世界データ循環」を俯瞰する力を養う。さらに、豊富な海外経験や産業現場の経験を通して、この俯瞰力を確固たるものにしつつ、実世界データ循環による社会的価値創造に寄与しうる博士論文研究を行うことで、「実世界データ循環」を構築する力を得る。このようなプログラムを高い意欲と学力を持った学生に対して実施することで、産業界における将来のリーダー候補を養成する。

研究科に跨る学域において、学位プログラムを柔軟に（複数専攻教員の協働、外国人特任教員の雇用、国外からのプログラム参加）設立することを可能にする改革を行い、グローバル社会（採用側、入学側）のニーズに応え得る（top 100を確固たるものにする）教育研究組織を目指す。

2. プログラムの進捗状況

- (1) リーダーを養成する学位プログラムの確立に関しては、学内6リーディングプログラムが実施する科目を、博士リーダー人材育成のための統合カリキュラムとして位置づけ、名古屋大学の博士課程の要件の横断的な整理を進めた。また、カリキュラムに関しては、POコメント、学外評価、社会人メンターからのアドバイスや履修生の意見を参考に、講義時間や演習形式などの実施方法を改善している。例えば、D1年次向けに新たに開講した「実世界データ循環システム特論II」では、講師の分野や講義スタイルに応じた柔軟な講義形式により実施した。また、全履修生に学内外1人ずつのシニアメンターを配置するとともに、D1次履修生に研究室ローテーションを体験させることにより、専門分野の枠を超えた研究指導を実践した。また、履修生専用スペースを活用した各種ミーティングの実施、及び、異分野履修生提案による共同研究プロジェクトの実施（平成28年度は2件）により、履修生が切磋琢磨する活動を行わせた。また、4研究科長会議を年2回実施し、リーディング開講科目の修了認定への参入等、履修生

に過度な負担をかけないための提言を行った。

- (2) 産学官民参画によるグローバルリーダーとして成長及び活躍できる体制確立のため、各学生別に学内外のプログラム教員を配置し指導いただく学内外シニアメンター制度及び社会人メンター制度を導入し、月1回全履修生が集まるプレナリーミーティングにおいて、指導いただく機会を設ける（延べ75人回）とともに、産学官民の観点からのプログラム改善についての議論にも参加いただき、リーダー人材の基礎知識としてのプロジェクトマネジメント講義の新設などの改善がなされた。
- (3) グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の確立に関しては、外国人を含む特任教員を継続雇用するとともに、海外での語学研修（フィリピン）、サマースクール（ベトナム）及びスプリングスクール（メキシコ）の企画運営を行う等により、英語力の向上（TOEIC L&Rで97ポイント、TOEIC S&Wで33ポイント平均スコアが上昇し、当初目標を全員がクリア）を達成した。
- (4) 優秀な学生の獲得に関しては、学内での説明会、海外学生を対象としたリクルートキャラバンなどを実施、年2回発行のNews Letterやプログラム活動を伝えるホームページ「循環ストリーム」を通じた活動紹介等により、学生獲得活動を実施した。その結果、平成28年4月より、三期生15名（正規履修生15名）及び一期三年次編入生4名（正規履修生1名、準履修生3名）の計19名を受入れた。また、平成29年度より入学予定の選抜試験では、23名の志願者から学生12名の四期生（外国人6：日本人6、情報4:工学6:医学1:経済学1、男性9：女性3）及び二期三年次編入生2名（外国人1:日本人1、経済学2、男性1:女性1）を選抜し、多様な背景を持ち入学時に求める以上の英語力（TOEIC700点相当）のある優秀な学生の獲得を実現した。
- (5) 世界に通用する質保証システムに関しては、SNSとe-Portfolioの連携システム（eアゴラ）を活用して「文書、体験、議論」などの様々な成果物に基づき、総合的な質保証を行っている。本システムの実運用を通じて発見された問題点の改良により、多観点からの質保証環境の整備を進めるとともに、二期生を対象に2年間の学修状況を審査するQE1において、外国人や社会人も交えた形でのeアゴラを活用した質保証を行った。
- (6) 事業の定着・発展に関しては、学内組織「リーディング大学院推進機構本部」が主催し学内6リーディングプログラムコーディネータが参加する月1回の会議を通じて、プログラム終了後の定着・発展に関する議論がなされている。具体的には、事業終了後に関しては、教育研究組織改革を通じたプログラムの内製化を進めており、6リーディング共通する基盤機能（博士課程教育推進機構（仮））と、各リーディング個別の教育機能（情報学研究科附属・価値創造研究センター（H29年4月設立））の2階建ての運用をする計画である。また、同会議では、名古屋大学が幹事校となり2017年に名古屋で実施するリーディングフォーラム2017において、事業の定着・発展について議論することを企画・検討している。